

氏名	まさき てつや 政木 哲也
学位(専攻分野)	博士(工学)
学位記番号	博甲第936号
学位授与の日付	令和元年9月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	工芸科学研究科 造形科学専攻
学位論文題目	地蔵盆に見る団地の共用空間の寛容性について—京都市の公的賃貸住宅を事例として—
審査委員	(主査)教授 長坂 大 教授 中川 理 教授 松隈 洋

論文内容の要旨

本論文は団地の共用空間で開催される地蔵盆に着目し、この観察調査を通して共同体の形成・維持に資する祭礼行事が行われる共用空間の特性を考察したものである。全体で6章により構成されており、第1章を序論、2・3・4章を本論とし、補論の5章を挟んで、6章を結論としている。

第1章では、研究の背景と目的を示し、これまでの先行研究とそれに対する本研究の位置付けを行っている。また、研究方法を提示し、研究対象である「地蔵」「地蔵盆」「団地」「共用空間」等の主要な用語の定義をしている。

第2章では、京都市内の住宅行政と団地開発の経緯をふまえた上で、敷地内に地蔵を祀っている団地の分布状況を臨地調査によって明らかにし、団地における地蔵の受容がどれほどの広がりがあるのかを検証している。これにより、地蔵は団地の開発とともに郊外まで広がり、現在に至る経緯を明らかにした。社会的な動向に応じて団地の規模や立地は変遷したが、地蔵はそれを超えて存在し続けたことから、団地の共用空間には地蔵を許容・維持する素地があるという仮説を導いている。

第3章では、団地の共用空間における地蔵を許容・維持する素地を検証するために、住棟配置による共用空間の構成と、「団地内地蔵」の配置特性の関係を分析している。調査で得られたデータより「団地内地蔵」の配置特性の3つの類型を抽出し、「団地内地蔵」の位置と向きを分析することで、団地の共用空間に潜在する余剰性を明らかにした。こうして団地の共用空間の、地蔵という異質なものを許容する性質と、様々な共同体に空間を融通する性質とを指摘している。

第4章では、地蔵盆行事と団地の共用空間との関係を取り扱っている。調査対象は山科区と伏見区東部に分布する団地で行われていた地蔵盆である。「団地内地蔵」を持つほとんどの団地において地蔵盆の開催が認められたため、「団地内地蔵」は地蔵盆のために共用空間に祀られていると述べている。地蔵盆に占用された共用空間の範囲を見ると、あらかじめ規定されていた共用空間の用途は地蔵盆のために転用され、異なる複数の共用空間にまたがって展開されていることが、多くの地蔵盆で共通して見られる特徴であった。団地の多様な地蔵盆を、持続的に支えているのは共用空間における属性間の緩やかな分節であると結論づけている。

第5章は補論として、1970年頃の京都市での地蔵盆に対する社会的な関心の高まりが団地における地蔵に与えた影響について考察を行っている。

第6章は結論として、本論文で得られた成果について要約し、今後の課題と展望を示している。

論文審査の結果の要旨

既存住宅ストックの活用および地域コミュニティの活性化は、我が国のこれからの持続可能なまちづくりを実践する上で極めて重要な課題である。本論文では、こうした課題に資する新たな知見として、公的賃貸住宅団地における入居者等による自治的な営みとこれを受容する共用空間のあり方を、京都市における伝統的な祭礼行事である「地蔵盆」を通して提示している。

本論文における主要な成果として以下の点が挙げられる。

まずは、京都市における地域自治の実践例として近年見直されている地蔵盆行事に関する先行研究を整理した上で、これまでの地蔵分布に関する報告が市中心部に集中しているのに対し、大規模な臨地調査によって郊外を含め市内の広域に立地する公的賃貸住宅団地において多数の地蔵祠が存在することを明らかにした点である。行政や公的機関によって機能優先で整備された公的賃貸住宅団地に、「地蔵」のような伝統的な習俗が定着した経緯を、京都市における住宅政策の変遷と照合させることによって示すことに成功している。

次に、京都市の団地内に設置された地蔵祠を対象に、臨地調査によってその配置を類型化し、地蔵の設置を可能とした共用空間の特質を、潜在的な余剰性に見出した点である。また、地蔵盆という伝統的な祭礼行事そのものに着目し、その空間配列を、日常一非日常の差異から検討することで、団地空間の特徴を明らかにした点が挙げられる。文化人類学的な研究対象にもなる地蔵盆が、機能計画的に生まれた公的賃貸住宅団地の共用空間において、どのように展開されるかを統計値と観察調査を根拠にしつつ、空間論的に分析している。空間の使い方を「横断的利用」「転用」「緩やかな分節」などの言葉で説明し、共用空間の許容性や融通性に特質があると結論づけている。これは、これまで空間の機能や用途を中心に言及されてきた近代の都市空間を、新しい視座によって評価しようとする試みとして意義が大きい。

さらに、本論文によって得られた成果をふまえて、申請者が導き出した共用空間の「寛容性」という概念は、従来の建築計画学に対して一石を投じるものとなっている。これは人口減少社会における我が国のまちづくりを考える上で有効な指標であり、本研究の重要性は今後より一層高まるものと評価できる。

本論文の内容は、以下の2編の査読付き学術論文に報告されている。(論文2は2019年9月発行)

- 1) 政木哲也，長坂大：「団地内地蔵」の敷地内の配置と京都市における分布および変遷について—公的賃貸住宅団地の共用空間と習俗に関する考察 その1—，日本建築学会計画系論文集，第83巻，第749号，pp.1173-1182，2018年
- 2) 政木哲也，長坂大：京都市山科区および伏見区東部の団地の共用空間と地蔵盆の多様性について—公的賃貸住宅団地の共用空間と習俗に関する考察 その2—，日本建築学会計画系論文集，第84巻，第763号，pp.1871-1881，2019年